

# にちぎん

2022 NO.71

秋



インタビュー 扉を開く

**假屋崎省吾** 華道家

花を咲かせるポジティブ思考

地域の底力

**和歌山県有田郡有田川町**

住民一人ひとりの思いが実を結ぶ和歌山県有田川町

対談 守・破・創

**山形浩生** 作家・翻訳者・コンサルタント

**若田部昌澄** 日本銀行副総裁

仕事と遊びの曖昧な境界線から  
新たな可能性が広がっていく

エッセイ “おかね”を語る

**恩田 陸** 小説家 現金主義者の憂鬱

伝説的なアメリカのジャズ・トランペッター、マイルス・デイヴィスの自伝で、強烈に覚えているエピソードがある。マイルスが子供の頃、ある日、父親に「ここに〇〇ドルあるから、渡してきて」と、父の取引先におつかいに出された。はるばる出かけていってお金を渡したら、言われた金額に足りない。もう一度家に取りに戻る羽目になり、父親にお金が足りなかった、と文句を言ったら、父親は「なぜ私がおまえにお金を渡した時に、言われた通りの額があるかどうか確かめなかったんだ？」と逆に叱られた、というのだ。

お金がモニター上のただの数字のやりとりになってから久しいが、それと同時にモノやサービスに正当な対価を支払う、という意識も希薄になってきているような気がする。

私はクレジットカードを持つてはいるものの、めったに使わない。買い物も飲食も、可能な限り現金だ。長らく現金主義でやってきたが、コロナ禍もあって非接触が標準となり、このところやたらと分が悪い。電子決済優先、という店も増えてきた。世間的にも、未だに現金を使う割合が多い日本は後進国だ、みたいな言われようである。



絵・江口修平

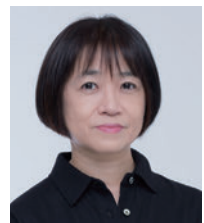
## 現金主義者の憂鬱

恩田 陸

以前、日銀の歴史をテーマにしたドキュメンタリーを観ていたら、広島に原爆が投下された日に、日銀の広島支店から本店に向けてたった一行、「キンコブジ」という電報を打った、という話に強く胸を突かれた。わずか数日後には、日銀広島支店に間借りする形で各銀行が営業を再開したという。災害が起きると、大量の現金が必要になる。東日本大震災の時にも、日銀は大量の現金を被災地に送り込んだそう。広域で停電し、ATMが動かず、電子決済もできないのだから、当然そうなる。今更ながらの単純な事実であるが、キャッシュレス即ち電気使います、ということなのである。

災害大国ニッポン。震災時の計画停電や、北海道の全道停電、最近も土壇場になってからの電力警報、などなど、ここ一〇年に起きたことを見ていると、どうひいきめに考えても停電に対するきちんとした備えができていないとは思えない。「二〇〇〇年に一度」クラスの思わぬ災害が次々と起きるのを目の当たりにしていると、太陽のスーパーフレアによる磁気嵐で全世界が数年間停電、というものになら現実味を帯びてくる。願わくば、シアに入念な複数の備えをした上で、キャッシュレスを奨励していただきたい。

おんだ・りく●小説家。1964年生まれ。92年『六番目の小夜子』でデビュー。『夜のピクニック』で吉川英治文学新人賞と本屋大賞、『ユー・ジニア』で日本推理作家協会賞、『中庭の出来事』で山本周五郎賞、『蜜蜂と遠雷』で直木賞と本屋大賞を受賞。その他『木曜組曲』『禁じられた楽園』『木洩れ日に泳ぐ魚』『消滅』『ドミノ in 上海』『スキマワラシ』『日曜日は青い蜥蜴』『灰の劇場』『薔薇のなかの蛇』『愚かな薔薇』『月曜日は水玉の犬』など著書多数。



写真提供：徳間書店



- 2 エッセイ／“おかね”を語る  
現金主義者の憂鬱 小説家 恩田 陸



- 4 インタビュー／扉を開く  
假屋崎省吾 華道家  
花を咲かせるポジティブ思考

- 9 地域の底力——和歌山県有田郡有田川町  
住民一人ひとりの思いが実を結ぶ和歌山県有田川町



- 16 対談／守・破・創  
山形浩生 作家・翻訳者・コンサルタント  
若田部昌澄 日本銀行副総裁  
仕事と遊びの曖昧な境界線から新たな可能性が広がっていく

- 20 日本銀行のレポートから (1)  
「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) — 2022年7月—

- 22 FOCUS → BOJ 41 日本銀行文書局 福岡支店移転プロジェクト  
関係者の協力が築いた福岡支店新営業所

- 27 日本銀行のレポートから (2)  
「地域経済報告」(さくらレポート) — 2022年7月—  
別冊「地域の企業における気候変動を巡る取り組みと課題」 — 2022年6月—

- 33 トピックス  
那覇支店開設50周年記念展示を開催中 ほか



- 35 AIR MAIL from Washington, D.C.  
プラントベースで健康と環境保護を追求するワシントンの人々  
—進化を続けるプラントベースフード市場

※取材は感染対策を徹底して実施しています。  
本誌は9月2日(金)までの情報をもとに掲載しています。

## 表紙のことば

表紙の店舗は、日本銀行福島出張所です。明治三十二年(一八九九)七月十五日、東北地方では初、全国では本店を除くと七番目の日本銀行店舗として開設されました。この二階建て・土蔵造りの店舗は、福島一の生糸問屋「万国屋」から購入したものでした。

全国的にもとても早い時期にこの出張所が開設されたのは、福島が当時の重要輸出品であった生糸や米の有数の集散地であり、東北の金融の中心であったためです。

出張所開設当日は「一〇五万円の現金が運ばれてくる」ということで、駅前通りには緊張感がみなぎっていたそうです。そして、赤い旗を立てた十数台の馬車に積まれた現金箱が、興奮した人垣の中を通り、物々しい警戒のうちに出張所へ運び込まれたといえます。

東北経済の要として繁忙を極めた福島出張所は、明治四十四年(一九一)に、支店に昇格します。

支店昇格を契機に、日本銀行本店や東京駅の設計を手掛けた辰野金吾博士とその高弟・長野宇平治が二代目店舗を設計し、大正二年(一九一三)に完成しました。福島支店は、現在では三代目の店舗で営業しており、これからも地域の歩みを見守り続けていきます。



表紙・画 北村公司

華道家

# 假屋崎省吾

KARIYAZAKI Shogo

ダイナミックで優美ないけばなの世界を創造する假屋崎省吾さん。内気で無口な園芸少年から、日本を代表する華道家へと大輪の花を咲かせました。流派の伝統を超越するような「美」の感性はどのようにして育まれたのでしょうか。裕福ではなくても日々の暮らしに彩りを与えてくれた亡き父母への感謝から、枯れるからこそ美しい「いけばな」の魅力まで、やさしい言葉で語っていただきました。



# 花を咲かせるポジティブ思考

## 父と母が広げてくれた 自分だけの美しい世界

—— 假屋崎さんは少年時代から花が好きで、クラスの男の子が熱中している野球やサッカーよりも、庭で植物の球根を植えたリ株分けしたりするのが楽しみだったと伺いました。やりたいことを自由にやらせてもらったことが今につながっていると著書でも書いておられますが、ご両親や学校の先生方からどのような教えを受けてこられたのでしょうか。

假屋崎 多感な時期に、ほかの子とは違うものに関心を持っていただけですが、自分のはのんびりしていて、あまり人のことは気に

ならなかったんです。自分の世界というものがありません。両親も、これをやらなくちゃ駄目とか、あれはやっちゃいけないとか言わないでいてくれた。好きなことを、もっと伸ばして広げてくれる、そんな親でした。学校は、今のように少子化になる前の前の時代でしたから、一クラスの人数が多いし、クラスの数も多い。それなのに、担任の先生は一人ひとりのことをよく見ていました。幼稚園、小学校、中学校と、居心地が悪いと思っただ記憶はないんです。例えば、体育が不得意でしたけれ

ども、先生は人間味があって、できなくてもちゃんと認めてくれるところがありました。それに、世の中でいじめと言われるような出来事も、自分の関わる学校にはなかったように思います。——ご両親の趣味も園芸でしたね？ 假屋崎 父は鹿児島県生まれで、大学の建築学科を卒業した後、東京都の中央区役所に勤めた公務員でした。母は長野県生まれで、銀座でOLをしていました。まさに「銀座の恋の物語」(注)ということで結婚したんですね。新居は抽選で当たった都営住宅練馬区石神井(しんくじい)にあった新築の棟割り長屋で、六畳間と四畳半とトイレと台所に、南向きの広い庭が付いていました。父も母も田舎出身ですから、その庭で四季折々の花を育てていたんです。ツツジにアジサイ、バラにポタシ……。自分も物心がつく頃から園芸に興味を持って、種をまいたり、庭の設計図を描いたり、アサガオの品種改良のまねごとをしたり、花を育てる園芸少年になりました。

(注) 一九六一年に発売された石原裕次郎と牧村旬子のデュエット曲。



かりやざき・しょうご●華道家。銀座にて假屋崎省吾 花教室を主宰。1958年生まれ。東京都出身。早稲田大学卒。美輪明宏氏より「美をつむぎだす手を持つ人」と評され、日本初の「華道家」として世界各地で「いけばな」を広める活動にも精励する。クリントン大統領来日時の会場装花、明仁天皇御在位10年記念式典・舞台装飾、明仁天皇御退位・徳仁天皇御即位スタジオ装花、花博覧会のプロデュースなどを手掛ける。女子美術大学・客員教授、フランス観光親善大使、オランダチューリップ大使などを務め、「シンビジウムのコサージュ展示（7,585個）」の世界ギネス記録にも認定される。着物、ガラス器、ジュエリー、棺、骨壺などのデザイン・プロデュースをおこない、デザイナーとしての才能を發揮。また、ライフワークでもある花と建物のコラボレートとなる個展“歴史的建築物に挑む”を開催、世界各国でも展示会を開催し国内外で目覚ましい活動を展開している。その他、花を使った情操教育の「花育」や「少子化問題」「伝統工芸品の振興促進」などの地域活性化を促す社会ボランティア活動も積極的に取り組み、2022年、華道歴40年を迎え、ますます活躍の場を広げている。

クラシックが好きな母の影響で、自宅でバイオリンも習いました。小学校の入学前から、先生に出稽古を付けてもらっていたんです。中学からはピアノの教室に通いました。父は建物が大好きで、年子の妹と家族四人で、いつも旅行をして、みんなでお城やお寺を見に行きました。父の書棚に並んでいる建築の本や平面図を見たり、一人で出掛けて元華族のお屋敷とかを眺めたりするのも楽しみでした。なかでも日銀の歴史的な建築物、これ

は本当に極め付きで、大好きでしたね。本当に趣味がいっぱいある子で、どれも同年代の子の趣味とはかけ離れたものばかり。もともとコミュニケーションを取るのが苦手な上に、自分の好きなことを話したって誰も乗ってこないわけです。——それでも、周りからいじめられたり浮いてしまったりすることはなかったのでしょうか。假屋崎 自分は真面目な方で、誰にでもちゃんと挨拶をしてい

ました。相手の懐に深く入らず、そこそこのお付き合いができていたんだと思います。周りから見れば女の子みたいな子だったんだらうけど、「人と違っていいな」と小さい頃から自覚していたので、対処法がわかっていたのかもしれない。何しろ、両親が向き不向きをちゃんとわかってくれていて、どこを伸ばせばいいかも考えてくれた。今となつては感謝してもしきれないです。

棟割り長屋に家族四人、何なく自由なく暮らしていました。でも、蓄えは全くありませんでした。普通の家は、いろんな目的を持って貯金をしていらしたと思うんですけど、うちは真逆

## 花をいけるときは直感で決断する

——大学生活はご自身が求めていたものとは違って、挫折感もあったと著書に書かれています。假屋崎 大学は希望のところに入れなくて、二浪して別の大学に進みました。でも、自分に合わないんじゃないかなと思っ

で、生活を楽しむためにお金を使っちゃおうという家庭だったんです。

そういうことも、自分が大人になっていく成長過程でかえってよかつたなど。日々、美しい花や音楽に囲まれて暮らし、なおかつ、こんなのが見たい、あそこに行きたいと思っていると、自然な流れで「いいよ」となり、家族みんなで楽しむ。もつとお金があつたら、ちよつと違うことになつていたかもしれませんし、あまりになさすぎてもこういう日々は経験できなかつたはずなので、ちよつどいい塩梅の暮らしをさせてもらったことは、とてもありがたかつたなと思っています。

て、今度は早稲田大学に入り直しましたが、やっぱり同じこと……。何とか卒業して、アパレルメーカーに就職。当時は一九八〇年代のデザイナーズブランドブームで、面白そうに見えたからです。

一方で、早稲田大学の学生時代から通い始めた東京・青山のいけばな教室（草月流）は続けていました。就職して三カ月たったとき、朝から晩まで働きながらいけばなの修業もする、こんな生活を一生続けられるかなと思ったんです。教室の元から英国人芸術家のワークシヨップに参加するように指名も受けていました。仕事かいけばなか。アパレルの社長さんに相談して会社を辞めさせてもらい、それからフリーターになったんです。ファストフード店やスーパーマーケットでアルバイトをしながらいけばなの教室にコツコツと通い続けました。

休業時代は苦勞がいっぱいあったでしょうと、よく聞かれるんです。その時々にはいろんなことがあります。振り返ってそれが苦勞だったという感覚は全然ないんです。なぜかという、いけばなが好きなことだったから。お金にはならなくても充実していたんです。アルバイトもつらくありませんでした。ファストフード店の

時給は三六〇円ぐらい。今の人はびつくりでしょうけど、とても昔のことですからね。そんな頃に、調理をやっていたら店長さんに「ちょっとレジをやってごらん」と言われたんです。それで接客するようになったら、すごく評判がよくて。「カリヤザキくん、カリヤザキくん」と親しみを持って呼ばれるようになりました。苦手だった人とのコミュニケーションも少しずつ苦ではなくなり始めたんです。主婦のパートの皆さんとも仲良くなって、その後、いけばなの個展を開くと何度も見に来てくれました。お客様との接し方は、アルバイトで自然と身に付いちちゃったんですね。

——好きなことを仕事にするのは、そう簡単なことでもないと思います。

假屋崎 好きなことを一生懸命続けていても、根本的に才能がない人もいらっしやいます。いけばなの世界も同じで、諦めるのは早めがいいと思うんです。なまじつか引きずって、取り返しのつかない年齢になってやっ

ぱり駄目だと思うよりは、さつさと見切りをつけて別を当たるほうがいい。

自分は、無駄だと思えることは好きじゃないんです。合理的な人間です。一日に何個もスケジュールを詰め込んだりしちゃう。仕事をするときは一気に集中するんです。だから、花をいけるときの速いです。心掛けているのは、決断。どの色の、ど

の形の、どの状態の花を選んで、どう構成するか。これ、これ、これという感じでどんどん決めていっちゃう。美しいかどうかを瞬時に判断できる「絶対美感」は、華道家には不可欠な能力です。手伝ってくれるスタッフがのんびりしていると本当にイライラしてしまいます。

家を買うときだって決断が早いです。最初の東京・表参道の



目黒雅叙園「百段階段」において開催された特別企画展「華道家 假屋崎省吾の世界」(2010年)での作品 (提供: (有) カリヤザキショウゴ)

家は、中国の上海から成田空港に到着したときに、不動産屋さんから「すごくいい物件があります」と連絡が来て、「じゃ、うちへ帰る前にそこに寄りますよ」と、トランクを持ったまま見に行つて「はい、買います」となったんです。それからほんの数年で、皆さんが假屋崎御殿と呼んでくださる家を新築することになります。そのときも美輪明宏さんのお宅に招かれ、タクシーで帰ってきたら、男の人が三人、隣の家を見上げて話をしていました。「売りに出るんですか」と聞いたら「そうです」と。

昔から「隣の土地は借金してで

## 新しい「美」を生み出し 人の心に感動を残したい

——生活を楽しむための出費は惜しまない家庭で育った、というお話がありました。いま假屋崎さんご自身はお金をどううふうに捉えておられますか。

假屋崎 自分の夢を実現するためのアイテムの一つでしょう。大事なのは使い方です。自

も買え」と言います。なのですぐ「この家買います」と即決したんです。

——直感的な判断で、結果的に失敗したことはありませんか。

假屋崎 あまりないです。不思議ですけども、直感で選んだところにどンドンお客様が来て満杯になる、というようなことばかり起こるんです。また、海外に行くと、何十年ぶりかの人に会ったりするなど、思いも寄らないことに出くわしたり、夢が実現したり……。何かがご縁をくださるのか、これは何だろうなということですが、たくさんあるんです。

分はさっぱりしていて、きれいな使い方をしているのかもしれない。

——假屋崎さんの生き方や考え方には、すごくポジティブなところを感じます。

假屋崎 それはあるのかも。出会った人から「元気になった」と

とか「エネルギーをもらった」と、よく言われるんです。自分は本当に控えめで、前へ出たくないという気持ちがあるのに、何だかわからないんですけれども、そう言われちゃいますね。

花というのは、置かれている空間が元気がいっぱいだと、咲くことだけにエネルギーを使えるから長持ちするそうです。これも不思議なんですけれど、我が家の花はとても長持ちするんです。切り花の活力剤を入れてはいますが、バラは一カ月ぐらい咲いています。

でも、展覧会に出した花がすぐ駄目になっちゃうこともあるんです。その場に集まる人たちがどこか病んでいたり、負のパワーを持っていたりすると、花は癒やすことにエネルギーを使い切つて枯れていくんです。きれいだなと素直に感動してくれる人がほとんどですけど、残念ながら、なかには「こんなすごいところで展覧会を開催できてカリヤザキはうらやましい」とか、妬みやそねみの負のオーラが燃えたぎっている人もいます。

わけです。

——逆に言えば、花はそういう悪いものを吸収してくれているのかもしれないですね。花を通じて假屋崎さんが伝えたいことは何でしょうか。

假屋崎 花は、それ自体、自然が生み出した完成された「美」です。その完成された美しさを最大限に引き出して、自分の理想とする「新しい美」を生み出す。そういうことを自分はやっていきます。それが生きがいになっていくし、自分のつけた花をご覧になった人の気持ちが良い方向に変わっていくことがあれば、とてもうれしいです。花はやがて枯れていきます。美しいときは一瞬で、はかないものだからこそ、人の感情に訴えかけたり何か新しいものを生み出したりするんです。そこがすてきなと思いますね。自分は命ある限り、その一瞬の花の美しさを人の心に残していきたいという思いがあります。

——本日は、ありがとうございます。

(聞き手/情報サービス局長・上口洋司)





地域の底力——和歌山県有田郡有田川町

住民一人ひとりの  
 思いが実を結ぶ  
ありだがわちよう  
 和歌山県有田川町

暮らしやすいまちを目指す行政と、  
 自らの考えて立ち上がった住民たち。  
 その双方の前向きな力が合わさり、  
 和歌山県有田郡有田川町では今、  
 ゆっくりと、そしてしっかりと  
 活性化が進んでいる。

取材・文 山内史子  
 写真 野瀬勝一

和歌山県有田川町が誇る美しい景色の代表格「あらぎ島<sup>しま</sup>」は、江戸時代に開拓が行われた棚田。県内では唯一「日本の棚田百選」に選ばれており、2013年には「<sup>あらぎ</sup>島および三田・清水の農山村景観」として国の重要文化的景観に登録された。

## 環境、教育、子育てを柱にした暮らしやすいまちづくり

和歌山県の中ほどに位置する有田郡有田川町は、二〇〇六年に旧清水町、旧金屋町、旧吉備町が合併して誕生した。その主要産業は、「有田みかん」を要とする柑橘類の栽培。江戸時代に発展した伝統が受け継がれ、二〇二一年には「みかん栽培の礎を築いた有田みかんシステム」として日本農業遺産に登録された。



「さまざまな施策により人口減少を抑えて2060年にも人口2万人の確保を目指す中、5年ごとの『人口ビジョン』を設定しているのですが、現状では2025年の目標値を上回る結果が期待できそうです」と話す町長の中山正隆氏。



人口は約二万五〇〇〇人と県内の町村では最多ながら、近年はゆるやかな減少が続けてきた。しかしここ数年、転入者の増加によりそれに歯止めがかかっているという。町内唯一の駅であるJR藤並駅まで、特急利用なら新大阪から直通で約九〇分、和歌山市内まで阪和自動車道有田インターチェンジから約二〇分という利便性もあるが、それだけが理由ではない。旧吉備町の町長を経て有田川町の初代町長に就任した中山正隆氏に、その背景について伺った。

「若い世代が暮らしやすいまちづくりを目指し、合併直後から柱にしているのは環境、教育、そして子育て支援です。まずは子どもたちが学ぶ場の環境整備が大事だということ、就任後は真っ先に幼稚園から中学校までクーラーを設置しました。その結果、夏場でも十分な授業時間が確保できたことに加えて、夏バテを回避できたことを通じて子どもたちは給食を残さないようになりました」

他にも学童保育や図書館の充実、高校生までの医療費無料化など、教育、子育てには多くの予算が割かれていた。

環境面では、資源ごみの活用に注目したい。町の随所に「ごみステーション」が設けられ、住民が分別を徹底したことで、それまでは仕分けに約三〇〇万円かかっていた費用負担が、逆に資源ごみの売却により三年間で約八〇〇万円の収益となった。



有田川に建設された二川ダムの維持放流水を活用する小水力発電は、新エネルギー財団による「平成28年度新エネ大賞」で資源エネルギー庁長官賞を受賞した。



町のあちこちに設けられた「ごみステーション」は、それぞれの自治会が管理。細かいごみの分別で町の経費が削減されたことにより「低炭素社会づくり推進基金」が生まれ、「太陽熱利用設備補助制度」「コンポスト容器的無料貸与制度」などの新制度が設けられた。

「分別には手間がかかりますが、町民の皆さんのご協力があることでそのことです。職員が度々足を運んで話し合いを重ね、ご理解をいただきました。今では子どもたちも、細かいごみの分別を当たり前前に思っています」

二川ダムの維持放流水（注）を利用した小水力発電は、画期的な試みだった。約三億円が建設に費やされたが、完成後は売電により年間約五〇〇〇万円の収益を生んでいる。これは役場職員の意見を実現させたもので、町の創生総合戦略も職員の提案を受けて四〇歳未満の若手が手掛ける。

（注）維持放流／自然環境保持の目的等で行われる、河川の流水の機能を正常に維持するための放流。



果実のみならず、有田みかんはジュースをはじめ多様に加工、商品化されてきた。写真は有田川町グリーンツーリズム推進協議会の公式ウェブサイトでオープンの際、記念プレゼントとして使われた「絵本のまち有田川みかんジュース」。



「みかんのみっちゃん農園」の小澤光範氏は、みかんを含めた約60種類の柑橘類の栽培にいそしむ。学生インターンの受け入れや子どもたちを対象とした講演など、農業の未来のために積極的な活動を行っている。

鎌倉時代の僧・明恵上人は有田地域の出身。鷲ヶ峰の中腹、明恵上人が修行を重ねた場所は「神谷遺跡」として国指定史跡に。標高586メートルの鷲ヶ峰は、頂上から町を広く見渡せ、コスモスやツツジの名所としても知られる。(写真提供：有田川町)



上げてくれと言っています。また、予算がないからという理由だけでアイデアを否定すると、前進できない。困難があっても、『やら（やるう）』となればさまざまな工夫をみんなで考えて進んでいける。住民の皆さんには、自分たちが住む町は自分たちでよくしなければいけないとお話しています。行政が主導するのではなく、まず自分たちで考える。それを町がサポートする。実際、有田川町には今、そういう主体的な住民がたくさん

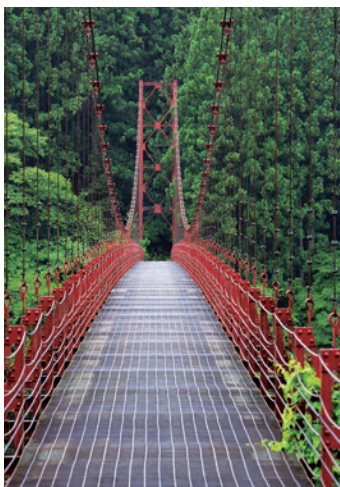
「役場の幹部たちには、若い世代の声はとにかく一回取り

いるんです」  
二〇一五年には、官民の連携により環境を立て直し「全米でもっとも住みたいまち」と称される米国オレゴン州ポートランド市と連携が結ばれた。ポートランド市と、互いに行き来して行われた講演会やワークショップは、有田川町の住民が主体となった活動につながった。

あらたな手法を取り入れ 伝統的な産業を受け継ぐ

自分で考えて立ち上がった住民のひとり、みかんのみっちゃん農園の小澤光範氏だ。江戸時代から続くみかん農家に六代目の長

男として生まれたが、供給過多による値崩れから家族が苦勞する姿を見ていたこともあり、当初は家業を継ぐつもりはなかった。大学は農学部に進学し、紆余曲折を経て青果物を扱う企業に就職した。  
「そこでは全国の農家さんとの出会いがあり、販売方法や規模、取り組み方などさまざまな農業スタイルが見えてきました。これから消費者と生産者がより密につながる時代が来るから、やり方次第で農家は稼げる。長男なら地盤も機械もあるし、絶対に継いだほうがいい。出会った農家さんからそう言われたのも、心に響きました」  
二〇一六年、父の背中を追いながらみかん畑で働き始めたが、しばらくは試行錯誤の日々が続く。  
「みかんの木の栽培は三年、五年十年と、先を見据えた仕事をしなければなりません。雑に扱えば、それが後々返ってくる。自分が育てたみかんがおいしいとお客様から言われるようになったことで、自分がつくり



二川ダムの上流に架けられた「蔵王橋」は、全長約160メートルのつり橋。近年では景観の美しさでも人気を博している。

たいみかん、やりたい農業についてあらためて考えるようになりました」  
同じ有田地域でも場所により継がれてきた栽培方法は異なり、これまででは他所の技術を取り入れることはまれだった。だが、小澤氏は関心をもった農家の手法を学び、収穫量を増やしていく。さらには



上／みかん畑が広がるのは、水はけが良く日当たりに恵まれた斜面。機械化されていなかった時代、坂道を上り下りしていた先人の苦勞がその礎をつくった。  
下／より注目を集めるため、イベントなどでみかんを模した帽子をかぶるなど、小澤氏は自らが広生塔になることも。(写真提供：みかんのみっちゃん農園)



約46メートルの落差があり、和歌山県内では「那智の滝」に次ぐ高さと言われたことからその名が付けられた「次の滝」は、展望台からその全景が臨める。



有田川町と隣接する紀美野町に広がる生石高原は、標高870メートル。夏の深緑や秋のスキの時期には、その美しい景色を目当てに観光客が訪れる。

SNSを積極的に活用した直販でそのおいしさが口コミにより広がり、飲食店や食品メーカーとのコラボレーションも生まれる。コロナ禍ではSNSで直接やり取りを重ねてきたその関係が活き、売り上げが増加した。

外に向けて単独で発信し続けてきた小澤氏が現在、目を向けているのは地元だ。

「自分ひとりがもうかるだけでは、有田みかんという産業は持続しない。EC（電子商取引）やSNSの活用に関して相談を受けたこともあり、同世代の生産者を中心にグループをつくり、生産技術の情報交換や海外輸出を含む新規ビジネスを考えているところだ。僕自身がハブになり、人をつなげられると良いですね。現在、若手生産者

グループでドローンでの農業散布の仕組みを考えたりもしています。こうした取り組みが話題になれば、新規就農者や後継者の育成、最終的には有田みかんのブランドを守る結果になると思っています」

### 危機的状況が生んだ慣習にとらわれない取り組み

有田みかん同様、有田川町が日本随一の産地として誇る特産品が山椒。栽培されているのは、粒が大きいぶどう山椒という品種だ。

そのあらたな試みで注目を浴びているのが、「きとら農園」の新田清信氏だ。実家は農家ではなく、大進学以降は県外で暮らしていたが、結婚を機に帰郷して二〇一一年に就農する。

「ちょうど山椒が高値がついていた時期で、山椒農家の親戚の勧めもあり、もうかるならやってみようかと考えたんです。しかし、ほどなく山椒の価格が暴落し、収穫は上がっていたものの廃棄せざるを得ない状況に陥りました」

それまでは栽培して卸すだけ



「ぶどう山椒の存在や風味の魅力を、よりアピールして広めていきたい。それは自分の利益につながるだけではなく、将来的には産地を守ることもつながると思っています」と話す、「きとら農園」の新田清信氏。

だったが、危機的な状況の中で新田氏は山椒の粉末加工、直販という自立に活路を見いだす。

「摘んだばかりの新鮮な山椒は緑色ですが、時間が経つと茶色に変わります。採取したばかりの鮮やかな色のままの山椒を、加工して商品として出せるのは農家だけ。それを付加価値として売っていいうと思えました。インターネットを活用した発信、販売などを重ね、



左/粒の大きさだけではなく、ぶどう山椒は風味も通常の山椒より強い。  
上/新田氏が栽培から加工まで手掛ける、ぶどう山椒を石臼でひいて粉末にした商品と、自然林で採取した桑の葉茶。桑の葉茶は血糖値の上昇抑制などに効くといわれる。

お客様と直接やり取りするうちに品質を評価していただけるようになり、より上質なものを、という思いも生まれてきました」

実際、きとら農園の粉山椒は、さすがにいい香りと辛さが際立っていた。ここ最近では、海外で、あるいはスイーツや、クラフトビール、クラフトジンの業界など山椒の需要が広がっているうえ、供給量が減ったことで価格は再び高騰している。

「一方で、約二〇〇軒ある栽培農家の平均年齢は八〇歳と高齢者が

「家庭の事情で教師になる夢を自分があきらめたこともあり、夢をかなえられる強い子どもが地域に育ってほしいという思いを、絵本の読み聞かせを始めた頃から抱いていました」と、有田川町地域交流センター長の杉本和子氏は話す。



名な作家のワークショップや個展、町主催の絵本コンクールが開催され、「絵本のまち」を提唱している。きっかけをつくったのは、有田川町地域交流センター「ALEC」のセンター長で司書



「よみきかせ隊養成講座」の受講後、もう1年活動すると、保護者を対象とした絵本に関するアドバイスをやる「絵本コンシェルジュ」の資格が取れるという、ステップアップを図れる仕組みになっている。(写真提供：ALEC)

多く、存続が厳しい状況ですから、今は何とか産地を守っていききたいという気持ちで移住就農インテナーンも受け入れています」  
新田氏は山椒畑の周辺に広がる天然の桑にも着目。この桑は養蚕が盛んだった時代の名残で、かつて地元でつくられていた茶葉の製法を学び、桑の葉茶の販売も始めた。

「蒸しの工程では間伐材や倒木を乾燥させた薪を使用するなど、無駄を省いたことで結果的に環境負荷の小さい形になりました。徐々にそういったことも意識するようになり、ぶどう山椒も、一部を有機栽培に

切り替えました」

その地道な尽力は、二〇二二年六月に「第二一回わかやま環境賞」で最優秀賞をもたらし。

「山椒に限らず、今や第一次産業は加工から販売まで手掛けないと生き残れないのかもしれない。しかし、それがビジネスとして成立し、農業でも稼げると証明できれば、自分のように地元で就農して後に続く人が出てくるのではないかと期待しています」

### 子どもたちの心を豊かに育む 絵本が日常にある生活

実は、有田川町は絵本の世界では広く名の知られる存在だ。著名な作家のワーク

絵本作家を招くなどのイベントは、地元民だけでなく広く町外からも参加者が集まる。写真提供・ALEC



有田川町の地域交流センター「ALEC」は図書機能を要しつつも、カフェや読書や原画展を楽しめる施設。子どもたちが遊べる屋外のコーナーなどを有し、幅広い世代がひとときを過ごす。



住民が自由に絵本を借りられる「まちかど絵本箱」の一つ。モチーフは絵本作家の長谷川義史氏。

の資格を持つ杉本和子氏だ。「合併前、旧金屋町の文化保健センター図書室で勤務していた頃の来訪者は日に数えるほど。地元的生活に組み込まれていないことを実感する中、司書として自分ができることを考えたときに思い立ったのが、絵本の読み聞かせでした。さまざまな講座を受講してノウハウを学び、ボランティアの協力も得ながら活動を進めるうちにやがて、著名な絵本作家さんを招いたイベントを開催するまでになりました」

合併後の二〇〇九年に、図書機能にカフェや遊び場などを備えた有田川町地域交流センターが完成。絵本で有田川を全国に発信するという声が上がリ、「絵本のまち」というキャッチフレーズが生まれる。「その言葉を意識していようがないが、町の子どもたちにとっては常に絵本が身近にあり、作家さんのイベントやワークショップに参加できるのがふつうになっている。それを当たり前だと感じられるのは、幸せなことだと思います」

絵本を家庭に配達する「おうち

左から「有田女子会 UP Girls」の岩本奈央子氏、楠部睦美氏、天津やよい氏。3人が立つのは、楠部氏が営む2016年創業の民宿「もらいもん」。親戚からこの建物を譲り受けたことが、楠部氏のUターンにつながった。



女子会が制作した「shiyola」と「ASOBOLA」は、男性でも手に取りやすいデザインを心掛けたという。「shiyola」の裏表紙にある、「種を蒔かなければいつまでたっても花は咲かない」というメッセージが心に残る。

絵本箱」、町内のあちらこちらで自由に絵本を借りられる「まちかど絵本箱・絵本館」など、読み聞かせから始まった活動は広がり続けている。

「うちの町でもこんなことをしてほしいという、町外の声も聞えてきます。絵本が決定打になるわけではありませんが、移住先には教育的な取り組みがある地域を、と考える方は多いですね。今後の課題は取り組みの継続ですが、ボランティアを育成する『よみきかせ隊養成講座』は、五期目の二〇二二年までに約一〇〇人の参加者を数えています。これまで、多くの

## 女性たちが手掛けた 冊子が地元で再発見の扉を開く

人の前向きな姿勢に支えられてきましたが、センターのスタッフを含め、私の周りには何かあたらしいことに対して『やらんところ』とはならないのが面白いですね」

こうという話になりました。このままでは先細りになるかもしれない未来に対して、皆、何かしら思っていたからでしょう」

約四〇名の会員の経歴はUターン、Iターンを含め多

様。コミュニケーションを重ねながらワークショップ、映画や漫画、郷土料理といったそれぞれが好きな分野を活かした分科会などが開催されてきた。

「shiyola」の制作では、取材、撮影から編集まで、すべてが初めての作業だったため苦労はあったが、初版の三〇〇〇部が一年足らずでなくなった。現在もPR資料や情報誌としてニーズは強い。

「意外だったのは、有田川にはこんなに良いところがあるんだと、まずは町外から反応があったことでした。町内からも、再発見できたという声が多くあり、うれしかったですね。私たち自身も、なにげない景色などあらためて町の良さを知るきっかけになりました」

「女性が住みたいまちづくり」という町が掲げる目標に対しての意見交換の際、行政に言われたからではなく、自分たちで主体的に動



「まちのリビングルーム」をコンセプトとした「THE LIVING ROOM」。閉園した保育所を再活用したもので、地元の若手を中心とした地方創生グループ「AGW」が中心となり、住民がアイデアを出し合って、開設に至った。ここにあるパン屋「グランアヴニール」(左)やカフェ&バー、クラフトビールの醸造所には、町外からも人が訪れる。



そう話す楠部氏は、Uターン組だ。一方で同じく編集に携わった岩本奈央子氏は、これまでほぼ地元から離れることなく暮らしてきた。

「長く住んでいけばいるほど、町の良さには気付きにくいかもしれませんが、何も無いと思っている人は案外いますし、私自身、この町では住民が参加できるイベントが多数あることを知らずにいました。冊子を手にとった方が、この町の魅力に触れてくれると良いですね」

小水力発電やゴミステーションと併せて町の環境政策の一翼を担っているのは、ユーラス有田川ウインドファーム。



二〇二〇年には、さらに深掘りした「ASOBOLA」を制作。現在は役場の依頼を受け、移住者に特化した「sumola」の二〇二二年内の完成を目指している。その取材を担当した天津やよい氏は、二〇一九年に県内から移住した。「仕事がつっかけて赴任しましたが、その任期が終わってもまだ住み続けたいなど思えるほど楽しく過ごしています。事業をされている方をはじめ、女子会の活動を通してすてきな人と知り合えたのも大きい。この町は特定のコミュニティの枠を超えて人がつながり、プラスアルファの部分を一緒に取り組んでいるという印象がありますね」

コロナ禍により現在は活発に動

2002年に廃線となった有田鉄道の旧御霊駅跡は、多数の絵本作家の手によりカラフルに再生。旧御霊駅を含む有田鉄道跡は、歩行者・自転車優先道路「ポッポみち」として整備され、絵本作家の作品で多数彩られている。



交通網の基点として住民が行き交うJR藤並駅構内には、絵本を読める「まちかど絵本館」が設けられている。

けないものの、楠部氏は女子会の未来をこう語る。

「ポートランド市を個人的に訪れた際、住民の皆さんが自分たちの暮らしを楽しみ、町に愛着を持っているのが伝わってきたのが印象的でした。女子会の次の展開にまだ具体策はなく、継続は容易ではないかもしれませんが、自分たちが日々を楽しむことが、次の世代につなげていくうえで大切なのではないかとも思っています」

### 町に根付こうとしている 若い世代の移住者の増加

有田川町を巡る中で気付いたのは、役場の周辺や基点となる藤並

駅周辺の吉備地区で新築中の家屋が多いこと。町長の中山氏にそう伝えたところ、笑顔が返ってきた。

「おかげさまで二〇代、三〇代の若い世代を中心に移住者が増え、しかもその多くが、マンションやアパートではなく一戸建ての持ち家を選ばれている。うれしいですね。二〇二一年九月には初めて、前の月に比べてわずかながら町の人口が増加に転じました。中でも吉備地区はここ数年で人口が一五〇〇人ほど増え、小学校で教室が足りなくなっているくらいです。実際に有田川町に来て喜んでもらえる、暮らしやすいまちづくりをこれからも推し進めたいと思っています」

農業、林業従事者が多く自然豊かな金屋地区、清水地区は人口減

が課題だが、交流人口の増加を目指したグランピングや温泉施設のリニューアルが検討されている。

有田川町では、初夏に白い花で覆われ、秋には黄色い実をつけるみかん畑の景色の美しさにも、人々が魅了されるといいます。お会いした方々は皆、自分のことだけではなく広く町を、そして未来を考えていたのが共通していた。その思いは先々、どのような花や実をつけるのだろうか。農家が手間暇かけたみかんの木が育つようにゆっくり、そしてしっかりと、有田川町は前向きに進んでいる。

みかん畑がある高台から眺めた有田川町の景色。みかんの花の季節には、その香りが町を包むという。



# 守破創 対談

科学、文化、コンピューターなどさまざまな分野で言論活動を展開し、経済学やSFなどの翻訳でも知られる山形浩生氏。その膨大な仕事量はどのようにこなされ、また、どのように広がっていったのか。要点のつかみ方や視野の広げ方などを、同じく多数の著書・訳書がある若田部昌澄副総裁と語り合う。



日本銀行副総裁

## 若田部昌澄

WAKATABE Masazumi

1965年神奈川県生まれ。87年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業、90年早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了、91年早稲田大学政治経済学部助手、94年トロント大学経済学大学院修士課程修了、98年早稲田大学政治経済学部専任講師、2000年早稲田大学政治経済学部助教授、05年早稲田大学政治経済学術院教授、17年コロンビア大学経営大学院日本経済経営研究所客員研究員。著書に『経済学者たちの闘い』（東洋経済新報社）、『昭和恐慌の研究』（東洋経済新報社、共著）、『危機の経済政策』（日本評論社）、『ネオアベノミクスの論点』（PHP新書）、*Japan's Great Stagnation and Abenomics* (Palgrave Macmillan) など多数。18年3月日本銀行副総裁就任。

## 仕事と遊びの曖昧な境界線から 新たな可能性が広がっていく



作家・翻訳者・コンサルタント

## 山形浩生

YAMAGATA Hiroo

1964年東京都生まれ。90年東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修士課程修了、株式会社野村総合研究所入社。95年マサチューセッツ工科大学不動産センター修士課程修了。不動産開発などのコンサルティングのかたわら、科学、文化経済、コンピューターなど広範な分野で言論活動を展開する。主な著書に『経済のトリセツ』（旺文社）、『お金』って何だろう？ 僕らはいつまで「円」を使い続けるのか？（光文社新書、共著）、『新教義主義宣言』（河出文庫）など。訳書に、クルーグマン『クルーグマン教授の経済入門』（ちくま学芸文庫）、トマ・ピケティ『21世紀の資本』（みすず書房、共訳）など。なお、2018年に株式会社野村総合研究所を退職している。

時代の変化に合わせて  
自分の活動も変えていく

**若田部** 山形さんは、特定のカテゴリにはめるのは難しい方ですね。野村総合研究所（以下、野村総研）で開発援助に関わってこられました（現在は退職）、一方で、評論家や作家、何より翻訳者として名が通っており、経済学で言えばポール・クルーグマン、トマ・ピケティの翻訳で知られています。非常に多彩な活動をされてきているので、なぜそういうことができるのか、その方法論や仕事術に関心があるのですが、まずは話のきっかけとして、中学生の頃から好きだったというSFやパソコンのことをお聞かせください。最初に読んだSF小説を覚えておられますか。

**山形** ジュール・ヴェルヌの『海底二万里』ですね。ネモ船長がノーチラス号で世界を旅するという物語は、子ども心にとっても印象的でした。その絡みで、同じ作者の『十五年漂流記』も読みましたが、あの作品からは民主主義とは何かを



学んだ気もします。

本格的にSFと出会ったのは中学生になってからです。

**若田部** 『十五年漂流記』は私も好きな本です。一人ひとりに得意分野があって、その上で協力し合う姿が印象的です。中学生の頃は、パソコンも製作していたそうですね。

**山形** NECのビット・イン(注1)とか、その手のパソコンみたいなものがあるのと出てきた時期ですね。専門雑誌が創刊されたりもしていました。よく分からないけど実際には何ができるの? ということで、予備校をさぼって萩原によく出かけていました。

**若田部** 大学、大学院は都市工学を専攻していますね。何かきっかけがあったのですか。

**山形** 強い思いというより消去法で、という面が強いのですが、父親が建設会社に勤めていたので、その影響があったのかもしれませんが。

それと、子どもの頃に一年間だけニューヨークにいたのですが、そのときにフランク・ロイド・ライトが設計したグッゲンハイム美術館を見て衝撃を受けたことがあります。ぐるぐる回る螺旋状のデザインですが、子ども心に「すごいや。こんなができるんだ!」と感動しました。そんなこともあって建築の話は好きでしたね。

また、大学時代はバックパック旅行で香港などによく出かけていて、都市ごとの街の成り立ちの違いなどに興味を持っていたというのがあります。

**若田部** 大学院卒業後、野村総研に就職されています。不動産開発のプロジェクト、開発援助コンサルタントの仕事が多かったのかと思います。どのような経緯で、そうした仕事に就かれたのでしょうか。

**山形** 野村総研に入ったのにはちょっと経緯がありました……。

きっかけは大学院時代のアルバイトです。学部卒業後に野村総研に入社した同級生から翻訳のアルバイトを持ちかけられたのですが、その内容というのが、ヨーロッパやアメリカのコンサルタントが各国の文化政策をまとめたものを、読んで日本語にしてまとめ直せと

いうものでした。当時、野村総研が文化庁の白書づくりを請け負っていたようで、その資料となるレポートを読むというものだったわけです。

その当時の僕は大学院に通っていたわけですが、そのレポートの中に各国の建築や都市保存に関する政策などへのまとめがあったので、「これを使えば卒論が書けるぞ」ということで、喜んで取り組みました。

それで翻訳したものを要約し、同級生に送ったら、「お客さんから質問が来たから、また頼む」と。そんなやり取りが何度かあるうちに、「こういう仕事なら、自分もここで働いてみたいな」と思ったわけです。

ちょうどバブル景気の終わり頃のこと、テーマパークや不動産のプロジェクトが全国にあり、面白い時期ではありましたが、入社直後にバブルが崩壊しました。

**若田部** それで開発援助へ、という感じですか。

**山形** 最初はテーマパーク、次にリゾート開発という感じでプロ

ジェクトに関わったのですが、バブル崩壊で次々に参加計画が中断し、疫病神扱いされる始末です。そこで、会社の制度を利用してマサチューセッツ工科大学(以下、MIT)に留学させてもらいました。

その間にバブルは本格的にはじけて、帰国したら「これからはアジアだよ」という話になっていったんです。アジアに出ていって民間開発しますよ、と。

そうなると、アメリカで学んできた内部収益率(注2)とかネットプレセントバリュ(注3)といった話がばりばりに使える。これはやった、と思っていたら、今度はアジア通貨危機……。

そういう中で出てきたのが開発援助の仕事です。アジア各国で電

(注1) ビット・イン/一九七六年に萩原に開設したNEC(日本電気)のサービスセンター。

(注2) 内部収益率/投資案件への投資金額の現在価値と、当該投資が生み出す資金の現在価値を等しくする割引率のこと。

(注3) ネットプレセントバリュ/純現在価値。投資案件から将来得られるすべての資金の現在価値と、すべての投資金額の現在価値の差のこと。

力の民営化などの構造改革が叫ばれるようになり、開発やお金、その上の政策、経済的フレームワークといったコンサルティングが自分の仕事になっていったわけです。一方で、その頃からインターネットが広がり出して、自分の活動の一つになっていきました。

だから、時代に翻弄ほんろうされたというか時代のおかげというか、そういう面がかなりあります。

**興味のまま動いていると  
いつか仕事につながっている**

**若田部** MITには一九九三年から九五年に在学していたということですね。その頃、経済学に出会ったのですか。

**山形** はい。不動産経済をはじめ、ファイナンスや経済学の講義を受けました。そのときに、本屋で『クルーグマン教授の経済入門』に出会いました。それが面白かったので、少しずつ翻訳を始めたのです。

あの本に関しては、タイミングが良かったと思います。というのも、あの本の中にあつたアメリカのいろいろな問題が、その後、日

本でも次々に起こったからです。

例えば不良債権問題。日本でちょうど住専問題(注4)が起つていて、アメリカの不良債権を回収したRTC(整理信託公社)というシステムが参考になりました。

ほかにも、企業買収やM&Aなどがあり、あちこちを訳しているうちに半分近くが翻訳し終わったのです。それで、残りもやってみせ、と全部訳し終えてから出版社に持ち込んだところ、出版されました。

**若田部** 本業とは違う副業ですが、会社はその点について理解があつたのです。

**山形** 一応、こういうことをやりますという申請はしていません、駄目ということはあまりなかったと思います。

**若田部** 個人の仕事としてはどうですか。シンクタンクの研究員と翻訳などを両立する難しさはどのようなものでしょうか。

**山形** シンクタンクの役割に、「目新しいものを提示して説明する」という一面がありますよね。その点では、僕の活動は完全ではないま

でも、多少はつながっていました。

**若田部** 時間的なやりくりはどのようなにされているでしょうか。

**山形** 極端な話、情報収集しているのか遊んでいるのかの切り分けが曖昧というのがありますね。クルーグマンを訳しているのはシンクタンクの仕事なの？と追及されても、「仕事で使いますよ」と当時は言えましたから。

**若田部** 不良債権処理などで参考にしたわけですからね。

**山形** もちろん、かなりの部分は自分の興味で動いています。クルーグマンの翻訳も、結果的に仕事というお金になりましたが、やっているときは自分が興味を持ったから訳したわけですね。

コンピューターやネットのこと、ものづくりなどいろいろやっていますが、半分遊びでもあるし、それが後で別のところで仕事になったりしています。仕事をやっているうちにほかのものが出てくる、ほかのものをやっているうちに何となく仕事とつながってくる、という感じですね。

**若田部** それは意図せずには、ですか。

**山形** はい。いろいろやっているうちに隙間が見えてくるのです。

例えば「インターネットで経済がどうなるか」といったテーマです。そういう隙間を見つけて、その隙間について勉強をすれば、一時的にはトップが取れる。しかし、しばらくすると学者などが出てきて追い越されてしまうのです。が……。それでも、その頃にはまた何か別のテーマが出てきたりするんですよ。

**若田部** クリエイティブな方たちが言っていますが、仕事と遊びの境界線というのは曖昧で、曖昧であるがゆえにもすごい情熱を注げるといふことですね。

(注4) 住専問題／住専とは住宅金融専門会社の略称。バブル経済崩壊後、住専が巨額の不良債権を抱えていた問題。

**複雑化する社会の中では  
ジェネラリストが不可欠**

**若田部** 経済学と本格的に出会ったのはMIT時代ということですが、それ以前は、経済学をどう捉



えていましたか。

**山形** あまり面白くなかったのと、僕らの頃はポストモダンの全盛で、「今の経済学はもう駄目だ」という話を聞かされていたのですね。そのせいで、講義もほとんど真面目に聞いていませんでした。

**若田部** それが、クルーグマンの本で変わったのは、社会人を経験

して、ファイナンスの話とか、プロジェクトにもお金の話が大事だと気付いたということなのでしょう。

**山形** そうなりますね。クルーグマンのあの本が最初に読むのに良いのは、経済学なんて基礎的には三つのことしかないんだ、経済成長率とインフレと所得分配。この三つなんだけど、どれもよく分かっていないんだよ——という話から入ってくれるところ

ですね。でも、ここまでは分かっている、世間で出ているこういう話はピント違いだよと教えてくれるので、ありがたい構成です。  
**若田部** 確かに「経済学者は上から目線でものを書く」とよく言われます。でも、研究とか物事が面白いのは、分からないことがこうなっています、と解いていくとこ

ろにあるはずですよ。

山形さんはいろいろな分野に関わっていますが、その分野の要点を押さえるのにどんな工夫をされているのでしょうか。

**山形** まず一番薄い本をぱっと見でだいたいの枠組みをつかむ。次になるべく分厚い本を見て、「こういうテーマが上がるのね」と注目点や傾向を押さえる。そうすると、ほかの本を見たときに「この本はこのテーマを中心しているな」と見えてくるので、本の全部を細かく読む必要がなくなります。だから、まず全体像が分かるようにして、そこから入っていく感じだと思います。

**若田部** そのようにして広範な分野に関わる山形さんは、ジェネラリストと呼ばれるようですが、この点についてはいかがでしょうか。

**山形** そうですね、僕はジェネラリストです、圧倒的に。昔、大学の同期から「山形はあらゆることについて二流だけれども、それが強みだ」と言われて、そういうのを目指したいよねと。

僕はジェネラリストは必要だと

考えています。地球温暖化の問題でも何でも、各種問題の中でどれを重視するかというのはジェネラリストでないとい判断ができないはずですから。

**若田部** 確かに。いろいろなものを比較しないといけませんからね。  
**山形** スペシャリストも大事なのですが、ちゃんとしたジェネラリストがいないと、「今はこれがトレンドだからこれで行くぜ」みたいな話だけで、判断に際してのさじ加減を決められてしまう恐れがあると思っています。

**若田部** お話を伺って三つの点が印象的でした。一つは、才能の開花には時代や人との出会いといった偶然が大きく作用していること、二つ目は、仕事と遊びをむしろ分けて、それが合わさるところというか、曖昧なところが創造的な仕事を見つけられることが創造的な仕事には大事なことで、三つ目に、専門知識が高度化する社会にこそ山形さんのようなジェネラリストが必要だということです。

本日は、貴重なお話をどうもありがとうございました。



# 日本銀行のレポートから

日本銀行は、1月、4月、7月、10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。また、2022年4月以降は、展望レポートの内容を、より幅広い読者に伝えるための取り組みとして、そのポイントをイラストとともに簡潔に整理した資料（ハイライト）を公表しています。本稿では、2022年7月の展望レポート（基本的見解は7月21日、背景説明を含む全文は7月22日公表）のハイライトをご紹介します。

\*全文は、日本銀行ホームページに掲載されていますので、ご関心のある方は、ぜひそちらもご参照ください。

<https://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/>



## 「経済・物価情勢の展望」（展望レポート・ハイライト）

2022年7月



### 日本経済は回復に向かう

日本経済は、ウクライナ情勢等を受けた資源価格上昇により下押しされますが、感染症の消費への影響が和らぎ、部品調達難も解消に向かうなかで、回復していきます。

消費者物価の前年比は、本年末にかけてエネルギー価格、食料品、耐久財などの上昇からいったん上昇率が高まりますが、その後は減速します。エネルギー価格を除いてみると、消費者物価の前年比は、緩やかに上昇していきます。

### 物価は上昇率を高めたあと減速する





**感染症、ウクライナ情勢、  
市場動向に注意**

経済・物価見通しのリスク要因としては、感染症の動向、ウクライナ情勢の展開、資源価格や海外の経済・物価の動向に注意が必要です。また、金融・為替市場の動向と日本経済・物価への影響にも十分注意を払う必要があります。



**強力な金融緩和を継続する**

日本銀行は、2%の「物価安定の目標」の持続的・安定的な実現を目指していきます。また、感染症からの回復を支援するため、資金繰り支援と金融市場の安定に努めていきます。

**政策委員の経済・物価見通し**



(注) ●は実績値、○は見通しです。

日本銀行文書局 福岡支店移転プロジェクト

## 関係者の協力が築いた 福岡支店新営業所

二〇二二年四月、およそ四年半にわたる改築工事を終えた日本銀行福岡支店が新たな一歩を踏み出しました。そのコンセプト立案からデザイン、設計、工事のスケジューリング管理、引越しまで中心となって業務を進めてきたのが、文書局の管財課管財企画グループ、施設改築グループ、そして総務課総務企画グループです。さらに福岡支店はもちろんのこと日本銀行の各局室の多数の職員が関わり、綿密な計画を立てた上で関係者が一丸となって計画通りの竣工を目指す中、重要なポイントとなったのは、いかに適切に日本銀行の業務を継続しつつ、営業所の建物を改築するかということでした。

### 業務継続を命題として 進められた福岡支店改築

「福岡支店をはじめ日本銀行には全国各地に三二の支店があり、建物はいずれも本行が所有する不動産です。文書局管財課ではその管理全般を行っており、建物の老朽化等に伴う改築が検討される際には、管財企画グループが企画立案から竣工に至るまでの取りまとめ役を担います。今回の福岡支店改築にあたっては二〇一五年に具体的な設計に向けた手続

きが始められ、二〇一七年十月に着工。二〇二二年四月に地上五階、地下一階、延床面積約九二〇〇平米の新営業所が無事に竣工しました」

そう語るのは、管財企画グループ長で企画役の二重作直毅さんです。近年では二〇〇七年に那覇支店、二〇一三年には釧路支店で旧営業所とは別の場所に新営業所が建てられました。福岡支店では「居ながら工事」と呼ばれる同一敷地内での改築を採用。最初に旧営業所の駐車場などを更地にしてI期棟を、さらには旧

営業所解体の後にII期棟を建て、最終的には二棟をつなげるという、日本銀行としては初の試みとなる工事となりました。

「日本銀行の支店がそれぞれの地域において担うのは、通貨供給、資金決済、国庫金受払いといった経済活動の根幹に関わること。人間の身体に例えれば、血液循環の心臓部にあたります。地域の金融・経済調査を行い本部に報告する、アンテナとしての機能も果たさなくてはなりません。ですから改築においては支店の業務継続が大きな命題であり、約四年半の工事期間は進捗状況を細かく追い、先々のリスクを想定した上で調整を重ねました。コロナ禍という予期せぬ事態にみまわれながらも、関係者一丸となった協力体制が計画通りの工事の進行につながりました」

### 一〇〇年先まで見据えて考えられた 福岡のまちや人との親和性

福岡支店改築にあたり、設計から工事完成まで日本銀行内外の関係者との仲介役として本プロジェクトの進捗管理に深く関わってきたのが文書局施設改築グループです。初期段階から設計やデザインについて調整を重ねてきたという施設改築グループ長で企画役の滝田昌宏さんは、まずは地域との親和性がコンセプト

およそ4年半にわたる工事を終えた福岡支店新営業所



■工事の変遷：当地で業務を継続しつつ、段階的に工事を実施（①～④）



① 2017年10月：I期棟新築工事着手。



② 2019年12月：I期棟完成。2020年1月からI期棟での業務を開始。2020年2月より旧営業所の解体工事に着手。



③ 2020年8月：II期棟新築工事着手。



④ 2021年9月：I期棟とII期棟を接続。



上／旧営業所の正面玄関外装（門型）。大きな列柱のデザインは新営業所に引き継がれた。  
左／旧営業所の正面玄関を移築した新営業所の内玄関には、かつての面影が残っている。

の大きな柱の一つだったと話します。

「ルネッサンス様式を根幹として一九五一年に建築された旧営業所は、福岡市の中心地である天神地区に位置し、約七〇年にわたりランドマーク的な存在として市民に親しまれてきました。今回は一〇〇年先を見据えた建物を設計したこともあり、地元で根付き、歴史の一部になることも意識しつつ、まちなじむデザインを心掛けました」

実際、職員通用口の内玄関に旧営業所正面玄関の門型が移築されました。また、列柱や袖壁、面格子など新営業所の外観は旧営業所の意匠を一部踏襲したデザインになっており、館内の雰囲気も旧営業所のクラシカルな趣が受け継がれています。

「福岡支店には、九州・沖縄地区の各支店を統括する役割もあります。設計に際しては銀行券や国庫金といった各種業務の取扱量や来店者数に加え、職員の働きやすさ、さらには、お客様が利用しやすい動線をイメージしてレイアウトを検討しました」

時代のニーズに応えた、環境や社会への配慮も重要なポイントです。

「太陽光発電設備の設置や雨水の植栽散水利用など、環境には設計当初から配慮しました。業務継続のためには、十分な耐震性を確保できる免震構造や自家発

電機の設置も重要です。敷地の一角には緑地帯や小さな広場を設け、また、バリアフリーにもしつかり対応するなど、地域社会との共生も意識しました」

滝田さんは、着工後も工事進捗管理のために現場に頻繁に赴き福岡支店、関係各局室、設計監理会社、施工会社のほか行政機関など外部との話し合いを幾度も重ねてきたそうです。

「多くの関係者が息を合わせて進めるのは決して容易ではなく、ようやく完成した時には感無量でした。ここまでこぎ着けられたのは、地元の方々が仕事を温かく見守ってくれたおかげだと思えますし、福岡支店の皆さんが喜んでくれたのも、うれしく思っています」

### 難関な工事の進行を支えた関係者との深いつながり

滝田さんと同じ施設改築グループ企画役の宮崎丈さんは、二期にわたった「居ながら工事」の苦勞を改めて振り返ります。

「I期棟は二〇一九年十二月に完工し、二〇二〇年一月十四日から業務が開始された一方、旧営業所解体後の同年八月からはII期棟工事に着手しました。その二棟の接続作業は現場責任者いわく、『これだけ大規模な免震建物をつなげたことはなく、全てが初めての経験』という難



工事でした」

Ⅱ期棟工事中は、既に完工した免震構造のⅠ期棟とⅡ期棟の建物が近接している状態であるため、万が一大きな地震が起きた場合には、建物がぶつかるリスクがありました。こうしたリスクを可能な限り避けるため、関係者で知恵を出し合い、Ⅰ期棟と接続するまでⅡ期棟は耐震構造とし、最終段階の短期間で接続を行った後に免震化する手法を採用しました。

「騒音や振動が直接伝わるので、二棟の接続工事をぎりぎりまで待ったのは支店業務への支障も考えてのことでした。近隣への影響をはじめ想定されるさまざまなリスクは事前に徹底して洗い出していたものの、作業が進む過程で気付くことも多く、防音、吸音対策は臨機応変に対応しました。また、平日の営業時間中の音出し作業は業務に支障を来す可能性があることから、週末を含む業務時間外へと工程の一部を変更したり、福岡支店長の記者会見時には、時間単位で工事の調整を行いました」

工期を守ることを第一に考えつつも、できるだけ支店側の思いをくみ、負担を軽減したかったと宮崎さんは話します。

「本行の職員には専門の知識や資格を有した技師がおり、技術的なことは彼らに確認して状況を把握しました。それを

かみくだいて関係者に報告、説明して理解を得るのもわれわれの仕事です。施工業者とも率直な話し合いを続けてきましたし、そういう意味でもっとも大事だったのはコミュニケーションの積み重ねでした」

長きにわたるコロナ禍もまた想定外のことでしたが、施工関係者の協力もあって、検温・手洗いといった感染症の基本対策のほか、工事における休憩時間の分散化なども円滑になされました。そうした中で、工事も順調に進めることができました。

「感染症の拡大により出張がかなわなかった時期にはオンラインで打ち合わせを行いました。状況を直接目で見て話を聞くのではやはり理解の度合いは異なり、現場に赴くことの重要性を再認識しました。苦労は多かったものの、施工関係の皆さんが『良い経験ができた』と話していらしたこともあり、完成を迎えた四月末に、発注者代表としてご挨拶させていただいた際には、これまでの苦労が思い起こされ、正直目が潤みました」

### 順調な引越しの陰にあった 緻密なスケジューリング

旧営業所からⅠ期棟へ、さらにはⅡ期棟完成後と、二度の引越しが行われた

のも福岡支店改築の特徴です。そこに関わる各部署の統括役を務めたのは、文書局総務課総務企画グループ企画役補佐の本田真一さんでした。

「まずはごく早い段階において、政策委員会室、決済機構局、発券局、業務局、システム情報局、情報サービス局、福岡支店、われわれ文書局がワーキンググループを組成し、密に情報交換しつつ検討を重ねました」

例えば市中から還流してきた銀行券の真偽、枚数、汚損度合いをチェックする自動鑑査機や、国庫金受入れの際に必要な情報を読み取るOCR装置の移設には本店の発券局や業務局も関係します。

「ほかにも各種システムなどのネットワークの敷設にはシステム情報局の職員が何度も福岡に出張して入念なチェックにあたり、新規の備品調達に際しては文書局物品課が舵を取ったり。そして、執務室のレイアウト検討から引越し業者の手配、現地での業者対応など、支店関係者が本店関係部署と連携して主体的に動いてくれたことにも助けられました」

自動鑑査機やOCR装置といった精密機器の移設には専門業者が携わる上、相応の事前準備が生じます。引越しに至るまでには、そういった関係部署が洗い出した膨大な作業項目をもとに

■旧営業所から移設された金庫扉や窓口カウンター

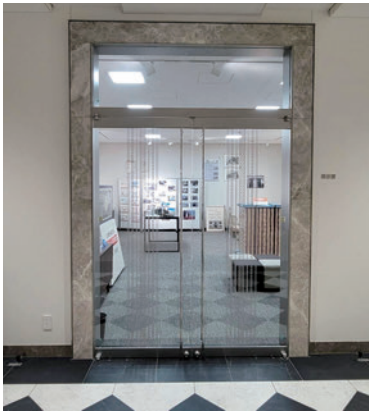
建物内部には、旧営業所の面影が残る。支店見学ツアーでは展示室も公開。



移設された窓口カウンター



クラシカルな趣が受け継がれた2階ロビー



支店見学ツアーで訪れることのできる展示室

全体スケジュールが構築され、全ての進捗状況を確認しながら準備が進められました。

とりわけ大掛かりになった旧営業所から一期棟への引っ越しには、本店各部署や西日本の支店から、数多くの職員が応援に駆け付けました。

「引っ越し当日のスケジュールも、人員の配置を含めて綿密に組み立てました。週末という限られた時間と、互いが干渉しない動線や必要な作業工程を考えると分刻みになる動きも生じます。そのため、最大限に努めたことは多数の関係者との情報共有です。ささいなミスでも業務継続の支障につながるため重責を感じていましたが、新営業所で営業が開始された月曜の朝になってようやく、引っ越しをやり遂げたことを実感してほっと

できました。自分自身が地元福岡市出身ということもあって、やりがいのある貴重な体験となりました」

**未来の改築へとつながる  
数々の困難を乗り越えた経験**

福岡支店改築に携わった文書局の職員がそろって重きを置いていたのは、情報共有の重要性でした。二重作さんは、こう話します。

「関わる人や検討事項が多いため、ひとつのほころびが大きく影響しかねません。全員が同じ視点できちんと動いてこそ、スケジュールが守られる。また業務継続のためには、細かいリスクまでしっかり洗い出して把握していくのも大切だと認識しました。二〇二一年十月から着手している金沢支店営業所改築工事においても、福岡支店での経験を活かしていきたいと思っています」

\*\*\*\*\*

二〇二二年七月には福岡支店の見学が再開され、移設した旧店舗の金庫扉や窓口カウンターなどもご覧いただけます。旧店舗の面影をたどるとともに、前例のない改築に取り組んだ関係者にもぜひ思いをはせてください。

（肩書などは二〇二三年四月二十日時点の情報をもとに記載）



# 日本銀行のレポートから

日本銀行では、本支店・事務所が企業への聞き取り調査等を通じて行っている各地域の経済金融情勢に関する調査の結果を、「地域経済報告」（さくらレポート）として、年4回（1月、4月、7月、10月）の支店長会議の機会ごとに取りまとめています。また、今回取り上げる「地域経済報告」（さくらレポート）別冊シリーズは、地域経済の中長期的な構造問題に重点を置き、その時々々の景気情勢に焦点を当てている「地域経済報告」を補完する位置づけの調査です。

\*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。 <https://www.boj.or.jp/research/brp/rer/index.htm/>



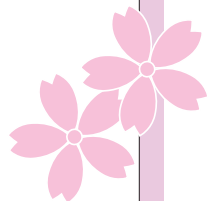
## 「地域経済報告」（さくらレポート）

### I. 各地域の 景気判断の概要 — 二〇二二年七月 —

各地域の景気の総括判断をみると、中国でのロックダウンもあって供給制約の影響がみられているものの、個人消費への感染症の影響が和らぐもとで、多くの地域で「緩やかに持ち直している」などとしている。

	【22/4月判断】	前回との比較	【22/7月判断】
北海道	新型コロナウイルス感染症の影響から下押し圧力が強い状態にあり、持ち直しの動きが一服している	➡	新型コロナウイルス感染症の影響がみられているものの、緩やかに持ち直している
東北	持ち直しの動きが一服している	➡	緩やかに持ち直している
北陸	持ち直しの動きが一服している	➡	基調としては持ち直している
関東甲信越	感染症の影響などから弱い動きがみられるものの、基調としては持ち直している	➡	供給制約の影響が強まっているものの、個人消費への感染症の影響が和らぐもとで、基調としては持ち直している
東海	持ち直しの動きが一服している	➡	持ち直しの動きが一服している
近畿	消費への新型コロナウイルス感染症の影響がみられているものの、全体として持ち直し基調にある	➡	中国におけるロックダウン等の影響が残るものの、消費への感染症の影響が和らぐもとで、全体として持ち直している
中国	サービス消費を中心に下押し圧力が続いているものの、緩やかな持ち直し基調にある	➡	下押し圧力は残るものの、緩やかに持ち直している
四国	緩やかに持ち直しているものの、一部に新型コロナウイルス感染症等による下押しの影響がみられる	➡	一部に供給制約の影響がみられるものの、全体としては緩やかに持ち直している
九州・沖縄	持ち直しのペースが鈍化している	➡	緩やかに持ち直している

(注) 前回との比較の「➡」、「➡」は、前回判断に比較して景気の改善度合いまたは悪化度合いが変化したことを示す（例えば、改善度合いの強まりまたは悪化度合いの弱まりは、「➡」）。なお、前回に比較し景気の改善・悪化度合いが変化しなかった場合は、「➡」となる。



## II. 別冊「地域の企業における

### 気候変動を巡る取り組みと課題」

—二〇二二年六月—

#### 1. はじめに

気候変動問題は、近年、国の内外において大きな課題となり、様々な分野での対応が進められつつある。わが国でも、政府が「二〇五〇年カーボンニュートラル」の実現を目指すとともに「二〇三〇年度に温室効果ガスを二〇一三年度から四六％削減することを目指し、さらに、五〇％の高みに向けて挑戦を続けていく」としている。

気候変動問題は、経済社会や企業の事業環境にも様々なかたちで大きな変化を及ぼしうるものである。実際、例えば二〇二一年に実施された中小企業を対象とする調査結果においても、中小企業の多くは、既に、社会全体の脱炭素化の進展が自社の経営にも影響を及ぼすとみている（図表1）。

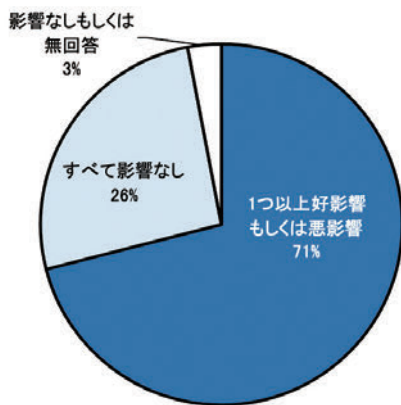
一方で、地域の企業の取り組みは、総じてみるとまだ緒に付いた段階と

考えられる。例えば二〇二一年の上記調査によれば、具体的な方策を実施または検討しているとの回答は中小企業の約二割であるほか、ほぼ同時期に中堅企業を対象に実施された別の調査でも、カーボンニュートラルに向けた中長期ビジョン等を策定済みまたは準備中とする回答は約三分割である（図表2）。実際、こうした地域の企業の取り組み状況を巡っては、行政機関や経済団体から、企業の具体的な行動は「まだまだこれから」との見方や、「具体的に何をすべきか分からない」との声が多い」といった指摘も聞かれている。もっとも、足もとにかけては、気候変動対応の機運は高まりつつあるとの指摘がある。前述のとおり、地域の企

業においても、気候変動問題が自社経営に影響を及ぼすとの見方自体は多い中、社会全体の脱炭素に向けた動きが進むもとの関心が高まってきているものとみられる。

こうした中、日本銀行では、本支店・事務所において、地域の企業における気候変動を巡る取り組みと課題について聞き取り調査を実施した。本レポートは、この聞き取り調査の結果を取りまとめたものである。本レポートにおいては、まず、地域の企業が気候変動に関する影響をどのよう

図表1 カーボンニュートラル進展が  
自社経営に与える影響



〈想定される事象〉

- ・省エネルギー化
- ・電気自動車の普及
- ・化石燃料（石油、ガス、石炭）の削減
- ・環境税導入などエネルギーコスト増加
- ・消費者の環境負荷への配慮の高まり
- ・環境に配慮した投資や融資の進展

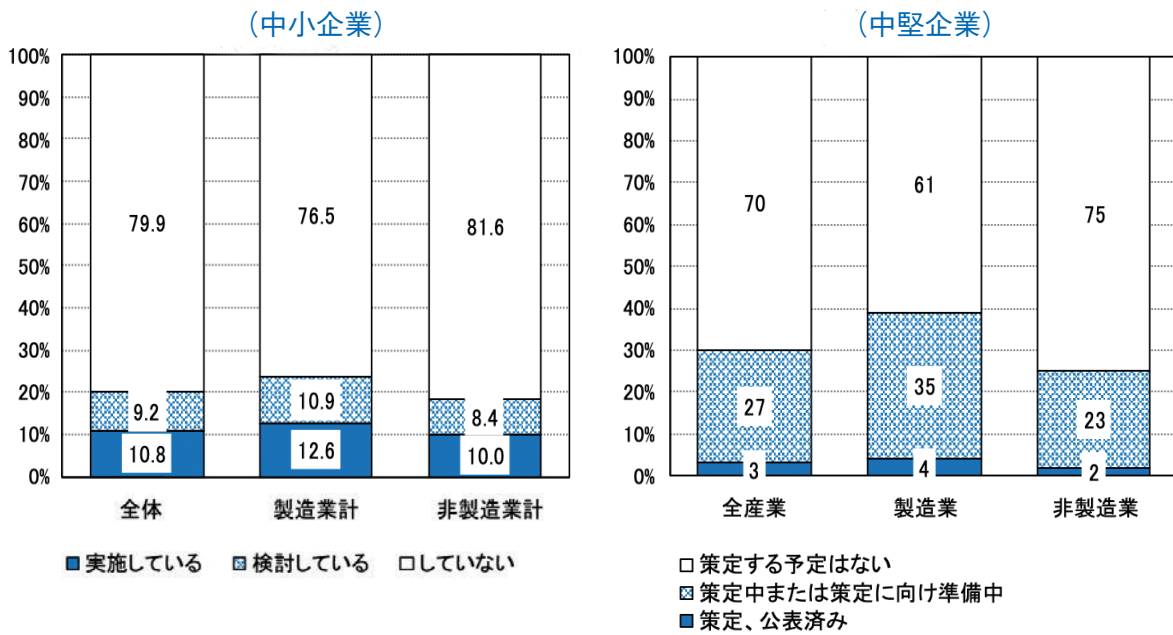
（注）カーボンニュートラル進展により想定される事象を6つ挙げ、これらが自社の経営に与える好影響・悪影響いずれかの有無について質問。

（出所）商工中金「中小企業のカーボンニュートラルに関する意識調査（2021年7月調査）」

えで、地域の企業における具体的な取り組みを、①自社のCO<sub>2</sub>の削減に向けたものと、②脱炭素化のもとの需要の変化に対応するものの二つの類型に整理して実例をみていく。さらに、こうした取り組みに関する企業の課題認識などを整理する。

なお、気候変動問題が経済活動に影響する波及経路については、一般に、①異常気象の増加などが経済活動に直接的な影響を及ぼす経路（物理的リスク）と、②気候変動問題への対応過程における経済主体の行動変化が経済に影響を及ぼす経路（移

図表2 気候変動を巡る取り組み状況



(注) カーボンニュートラル進展の影響に対する方策の実施、検討の状況。  
 (出所) 商工中金「中小企業のカーボンニュートラルに関する意識調査 (2021年7月調査)」

(注) カーボンニュートラル社会実現に向けた中長期ビジョン等の策定・検討状況。  
 (出所) 日本政策投資銀行「企業行動に関する意識調査結果 (中堅企業) 2021年6月」

## 2. 自社経営への 影響についての 地域の企業の見方

気候変動問題が地域の企業自身の経営に与える影響としては、「需要の

行リスク)があると考えられる。前者(①)の例としては、気候変動による災害の増加や農業生産への影響がある。後者(②)の例としては、脱炭素化に伴うエネルギー価格の上昇や脱炭素のための新しい技術の導入、さらには、こうした動きに伴う需要の変化がある。

気候変動問題については、わが国を含む各国政府がカーボンニュートラルに関する目標を掲げている中、脱炭素への対応がとりわけ大きな課題となっており、企業の動きも、これに関連するものが少なくない。こうした状況も踏まえ、本レポートでは、これら二つの経路のうち後者(②)移行リスク)に関連する動きを、主な整理の対象とする。

変化」を指摘する声が多く聞かれる。こうした影響としては、例えば、電気自動車(以下、EV)の普及により関連需要が増加する一方、自動車エンジン関係の需要は縮小するといったように、プラス・マイナス両面のものが意識されており、なかでもマイナス面の影響を指摘する声が多い。これと並んで、脱炭素化に伴うエネルギーコストの上昇といった「コスト面」の影響を指摘する声も少なくない。これらは、個々の製品の具体的な需要の増減やエネルギーコストの変化といった「具体的」かつ「目に見えるやすい」影響であることから、現時点でも既に相応の割合の企業によって意識されていると考えられる。

こうした影響のほかに、気候変動への企業の取り組み如何が採用活動に影響するようになっていて、あるいは、金融機関や投資家の視線が変化しつつあるといった点を意識する企業も出てきている。これらは、企業やその活動に関する「全般的な評価(レピュテーション)」にかかわるも

のであり、需要やコスト面の影響に比べると「抽象的」かつ「目に見えにくい」ことも少なくない。こうした面での影響を指摘する声が地域の企業からも聞かれることは、気候変動問題への関心が国際社会やグローバル企業の活動領域だけではなく、地域社会においても高まってきていることの反映であるともみることができる。

### 3. 地域の企業の具体的な取り組み

#### (1) 取り組みの種類

地域の企業においては、気候変動問題の影響が自社の経営に及びうることも念頭に置きながら、様々な取り組みが進められている。以下においては、これらの取り組みを①「自社のCO<sub>2</sub>削減に向けた取り組み」、②「需要の変化に対応する取り組み」の二つの類型に大別し、その具体的な事例をみていく。

このうち前者(①)は、例えば再

生可能エネルギーの利用により、企業が自らの企業活動から排出されるCO<sub>2</sub>の削減に取り組むものである。こうした取り組みは、社会全体としてのCO<sub>2</sub>削減の一環をなすと同時に、個々の企業経営という観点からすれば、エネルギーコストの変化やレピュテーションへの影響など、2. 経営に及ぼす影響に対応する意味合いも含むものである。

後者(②)は、例えばEVや再生可能エネルギーなどの分野における需要の取り込みといったように、社会全体としての気候変動問題への取り組みに伴う需要の変化に対応するものである。需要の増える領域に企業活動の重点が移行していくことは、経済社会において通常みられることであり、脱炭素社会への移行のもとで、そのような企業活動の変化は地域においても既に生じつつある。以下においては、それぞれについて具体的な取り組み事例をみていくこととする。

#### (2) 自社のCO<sub>2</sub>削減に向けた取り組み

##### (2-1) 具体的な取り組み

「自社のCO<sub>2</sub>削減に向けた取り組み」の主な事例には、①再生可能エネルギーの活用、②エネルギー効率の向上、③原材料の見直しといったものがある。企業が「CO<sub>2</sub>削減」に向けて取り組みうる方策には様々なものがありうるが、これらの取り組みは、技術やコスト面を含めて広く利用が容易であると同時に、排出量削減の効果が定量的に把握しやすいことなどを背景に、地域の企業においても広がりを見せていると考えられる。

##### ①再生可能エネルギーの活用

自社のCO<sub>2</sub>排出量削減のための再生可能エネルギーの活用としてもっとも典型的なものは、太陽光発電システムの導入であり、地域の企業においても、業種・企業規模を問わず多くの事例がみられる。このほかに

も、大企業・製造業を中心とする一部では、調達する電力を再生可能エネルギー由来のものに切り替える事例や、小水力発電やバイオマス発電など、地域に特徴的な自然環境や資源を有効に活用しながら取り組む事例もみられている。また、これらの導入においては、より効率的なエネルギー使用のためのシステムが併用されたり、補助金などの支援も活用されたりする例も存在する。

##### ②エネルギー効率の向上

CO<sub>2</sub>削減を図るためには、再生可能エネルギーの導入などによりエネルギー源を見直すことと並んで、エネルギー効率を向上させることも選択肢となる。製造業では工場などの設備を更新し、生産性の向上なども図りながらエネルギー効率を高める取り組みが多くみられる。非製造業においても、照明や空調等の設備更新によるエネルギー効率向上の取り組みがみられるほか、例えば輸送ルート効率化によって燃料の使用量

を削減する動きもみられている。

### ③原材料の見直し

CO<sub>2</sub>は、発電や熱生成などのエネルギー利用に伴って排出されることが多いため、企業におけるCO<sub>2</sub>排出量の削減策としても、上記①や②のようにエネルギー利用に関連するものが中心となる。もつとも、こうしたエネルギー利用に関連するもの以外にも、原材料の見直しによるCO<sub>2</sub>排出量削減を進めようとする動きがある。具体的には、廃棄物を原材料として再利用することによりCO<sub>2</sub>排出量を削減する事例が少なくないほか、CO<sub>2</sub>そのものを回収し原料として活用する研究開発の事例もみられている。

### (2-2) 企業が期待する効果

これらの取り組みは、直接的には、個々の企業が排出する「CO<sub>2</sub>の削減」そのものを目的としたものであることは、言うまでもない。もつとも、同時に、地域の企業がこうした取り

組みを進めるにあたっては、「CO<sub>2</sub>が削減される」ことに伴う様々な効果が意識されている。具体的には、

①エネルギーの自給や使用量の削減によるコスト面での効果を期待する企業があるほか、②サプライチェーン内での商品納入先からの要請が強まっていることを受け、それに応えることで取引の維持・拡大を期待する企業も少なくない。また、こうした具体的かつ目に見える効果と並んで、③顧客イメージや訴求力の向上、④採用面や株主からの評価への好影響などを期待する企業もある。

このように企業がCO<sub>2</sub>削減に取り組むことで期待する効果は、先に整理した「気候変動問題が自社経営に与える影響」として企業が意識している要素と重なる部分が少なくない。地域においてCO<sub>2</sub>削減に取り組む企業は、気候変動問題が自社経営に与える影響も意識しながら、CO<sub>2</sub>削減に取り組んでいると整理することができる。

### (3) 需要の変化に対応する取り組み

気候変動を巡る取り組みとしては、これまでみてきたような「自社のCO<sub>2</sub>削減の取り組み」と並び、「需要の変化に対応する取り組み」が存在する。こうした取り組みを典型的に示すと、①例えば再生可能エネルギーやEVに関連する需要など、エネルギー源の転換に伴い発生する需要に対応する動きがある。同時に、②省エネ型の設備など、エネルギー効率の向上を実現するために発生する需要に対応する動きもある。さらには、

③CO<sub>2</sub>排出の小さい原材料への転換など、エネルギー以外の経路を通じてCO<sub>2</sub>削減に資する分野への需要に対応する事例もみられる。また、④ZEHやZEB(注1)のように、これらの要素を複合的に組み合わせる需要を喚起する動きも活発になってきている。こうした取り組みは、先にみた「自社のCO<sub>2</sub>削減に向けた取り組み」を促進するとともに、ひい

ては社会全体のCO<sub>2</sub>削減にも資すると考えられる。

(注1) ZEHはNet Zero Energy House(ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス)の略語。ZEBはNet Zero Energy Building(ネット・ゼロ・エネルギー・ビル)の略語。消費するエネルギーを削減し、使用するエネルギーを自ら生産することで、エネルギー消費を実質ゼロとする住宅やビル。

## 4. 取り組みを進めるうえでの課題

地域の企業が気候変動を巡って様々な取り組みを進めるうえで、課題が指摘されることも少なくない。まず、製造業においては、現在の技術でCO<sub>2</sub>の排出を抑制することには限界があり、場合によっては長期的にわたる研究開発のプロセスを経て、新しい技術を実用化していくことが必要な領域が少なくない。こうした技術的ハードルに加え、CO<sub>2</sub>排出の抑制を実現する技術や手段が現在存在しているにもかかわらず、導入コストが高いことや、そのコストを価格に転嫁する

ことの難しさを指摘する企業は業種を問わず多い。

こうした課題と並んで小さくないと思われるのは、人材や情報の不足である。企業においては、特定の技術分野を想定した人材の不足を具体的に指摘する声がある一方で、特に、需要面などの自社経営へのマイナスの影響が漠然と大きいと考えている企業ほど、「具体的に何をすべきか分からない」とする先が多い。この点は、多くの中小企業がそうした「入り口」段階を含めた情報の不足に直面しているからこそ、漠然とマイナスの影響が大きく、対応が難しいとみている可能性を示唆しているともいえる。このため、気候変動への意識の高まりという経営環境の大きな変化の中で、地域経済が活力を維持・向上させていくには、こうした中小企業が感じている情報の不足への対応がとりわけ重要である。

人材や情報の不足といった課題に対し、地域の企業では、政府・地方公共団体、金融機関、経済団体、民

間事業者などの幅広い先の支援に期待を寄せている。このうち、金融機関に対しては、人材や連携先企業の紹介など金融機関の有する情報・ネットワークを活かしたサポートを期待する声がある。また、政府によるESG金融の普及・拡大に向けた取り組みや、日本銀行による「気候変動対応を支援するための資金供給オペレーション」(注2)が実施されるもとで、これが企業の資金調達の後押しになることを期待する声もある。これに対し、金融機関では、資金面をはじめ、企業の現状評価やその後の計画策定など各段階におけるサポートの実施やそのための体制整備を進めているほか、地域の大学や地方公共団体等との幅広い連携を通じて企業をサポートする動きもみられるようになってきている。先にみた中小企業における情報不足などの課題に対し、金融機関のこうした取り組みの意義は地域の企業にとって大きく、さらなる進展が期待される。

## 5. おわりに

ここまで見てきたとおり、地域の企業における気候変動を巡る取り組みは、様々なかたちで進みつつある。同時に、具体的な対応は検討していない、あるいは、そもそも「具体的には何をすべきか分からない」といった企業も少なくないのが現状であるとみられる。もともと、気候変動への対応は社会全体にとっての長期的な課題であり、その進展につれて、今後、例えばエネルギーコストの大きな変動や国内外での規制・ルールの見直し、消費者嗜好(嗜好)の変化など、企業経営を取り巻く環境が様々なかたちで変化していくことも展望される。

実際、今回の聞き取り調査においても、企業からは「この間の企業の意識の変化から、環境ビジネスに関する潮目(しほめ)が変化した」、あるいは「取り組みをPRしたところ、思いがけず新規需要の獲得につながった」といった声も聞かれている。また、気候変動に関する先行きを見据えた対

応の重要性を意識する企業も存在している。こうした企業からの声だけではなく、エネルギー価格については、感染症や地政学的な要因などによる不確実性があるとの指摘(注3)と並んで、世界的な気候変動への対応のもとで長期的にかなり大きく変化しうるとの分析も存在する(注4)。

個々の企業においては、こうした経営環境の変化が、場合によっては想定以上のペースや大きさで進みうることも念頭に、既に取り組みを進めている事例も参考にしながら、どのように対応していくかを長期的な観点から考えていくことが、今後ますます重要になっていくものとみられる。

(注2) 民間における気候変動対応を支援するため、わが国の気候変動対応に資する投資の残高の範囲内で行う資金供給オペレーション。二〇二一年十二月に初回オペを実施。

(注3) 資源エネルギー庁「令和三年度エネルギーに関する年次報告(エネルギー白書二〇二二)」

(注4) 倉知善行ほか「脱炭素社会への移行過程におけるわが国経済の課題…論点整理」(日本銀行調査論文、二〇二二年四月)



## 那覇支店開設五〇周年記念展示を開催中

▼一九七二年の沖縄の本土復帰とともに開設した那覇支店は、本年五月十五日に開設五〇周年を迎えました。これを記念して、支店の展示広場に特別展示コーナーを設置しました。

▼特別展示コーナーでは、支店開設時の重要な任務の一つであった米ドルから円への通貨交換の様子を紹介しています。東京から五四〇億円、コンテナにして一六一個分の現金を運び、



特別展示コーナーの様子

県内全域での通貨交換を完了するまでの様子を、当時の職員インタビュー記事やスライドショーなどで解説しています。ぜひ、お立ち寄りください。

▼特別展示の開催は二〇二二年十二月三十日（金）まで、開館時間は支店営業日の午前九時から午後三時です（入館無料）。詳細は日本銀行那覇支店のホームページをご覧ください。



## 「決済の未来フォーラム クロスボーダー送金分科会（第四回）」を開催（五月）

▼決済機構局では、五月二十三日に標記会合を開催しました。

▼会合では、①クロスボーダー送金の改善に向けた国際的な取り組みや、②AML／CFT対策（注）について、活発な議論が交わされました。

▼①では、クロスボーダー送金の課題（コスト、スピード、アクセス、透明性）の改善に向けて、昨年G20で合意された定量

的な目標関連の議論を含めて、さまざまな国際的な取り組みが紹介されました。今後、国際的な取り組みの重点が、課題の背景に関する基礎的な調査から、

改善の実現に向けた具体的な取り組みに移るため、官民の協力が一層重要になると説明されました。参加者からは、クロスボーダー送金ビジネスの改善に向けて、日本で取り組みを進める際、海外の取り組みも参照し得るといった声が聞かれました。また、顧客のニーズにきめ細かく対応するといった、日本固有の商習慣などを意識すべきとの意見も聞かれました。

▼②では、AML／CFT対策について、国際的な議論や、高度化に向けたAIを活用した実証事業などが紹介されました。高度化に向けた取り組みでは、デジタル技術を活用していく必要があるとの声が聞かれました。また、決済サービスを提供する事業者が増える中、幅広くAML／CFT対策の高度化を

目指す必要があるとの見方も示されました。

（注）マネーロンダリングおよびテロ資金供与対策を指す。

## 「決済の未来フォーラム デジタル通貨分科会…中央銀行デジタル通貨を支える技術（第四回会合）」を開催（六月）

▼決済機構局では、六月二日、標記分科会をオンラインで開催し、企業などで最先端の研究や実務に携わる方々から、中央銀行デジタル通貨（CBDC）に活用し得る具体的な技術や取り組みを紹介いただきました。

▼セッション①では、最近注目が高まっている「組み込み型金融」とCBDCの関係について、有識者の方々から最新の業界動向を交えて発表していただきました。セッション②では、CBDCシステムの基盤となる「台帳」について、データ形式などの技術的側面を中心に有識者の方々と活発な議論が行われました。セッション③では、デジタ

## 編集後記

■エッセイでは、小説家の恩田陸氏にご寄稿いただきました。私もその一人ですが、鋭い指摘に共感された方も多いのではないのでしょうか。

■対談では、ポール・クルーグマン、トマ・ピケティの翻訳などで知られる山形浩生氏と若田部昌澄副総裁にお話しいただきました。才能を開花させるきっかけ、仕事と遊びの境界の定め方やその相乗作用、さらには、スペシャリストとジェネラリストの役割分担など、いずれも興味深い話題について率直なやり取りをしていただきました。

■インタビューでは、華道家の假屋崎省吾氏を取材しました。今や世界を股にかけてご活躍しておられますが、ここに至る道のりは決して平たんではなかったそうです。ただ、その過程において、「直感を信じ、集中して取り組む。時には早く諦めて切り替えた方が良いこともある」というお考えを実践しておられ、とても潔いと感じました。

■地域の底力では、和歌山県の有田川町を取り上げました。町を愛する住民の皆さまが、自ら町の未来を考え、行政と一体となって取り組むことで、変化を生んでおられます。まさに地域の底力を感じる内容となっています。(上口)

## 【アンケート募集中】

「にちぎん」に関するご意見・ご感想は、アンケートよりお寄せください。

日本銀行のホームページからもご回答いただけます。

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。  
([https://www.boj.or.jp/announcements/koho\\_nichigin/index.htm/](https://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/))

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ(<https://www.boj.or.jp/>)をご覧ください。

にちぎん 2022年秋号  
編集・発行人 上口洋司  
発行 日本銀行情報サービス局  
〒103-8660  
東京都中央区日本橋本石町2-1-1  
☎03-3277-1609



デザイン 株式会社市川事務所  
印刷 株式会社アイネット  
禁無断転載

ル時代の金融サービスにおける相互運用性と標準化について、同様のテーマを扱った決済システムレポート別冊(本年三月公表)の解説と、パネルディスカッションが行われました。

▼日本銀行としては、企業の皆さまが有する最新の技術やノウハウを学習し、CBCDCの実証実験や制度設計に活かしていくことが大切と考えています。また、こうした活動を通じて、CBCDCの検討に関する連携の輪が広がっていくことを期待しています。

▼本フォーラムの議事概要などは、日本銀行ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。

**貨幣博物館**  
「にちぎん一四〇周年企画展  
「水辺の風景と日本銀行  
—日本橋川と中央銀行誕生  
までのあゆみ—」開催中!

二〇二三年十二月四日(日)まで

▼水辺再生への機運が高まりつつある現在、貨幣博物館の隣を流れる日本橋川周辺でも新しい街づくりが始まっています。



1882年水辺に開業した日本銀行遠景

日本銀行の創設前、日本橋川周辺には三井組、第一国立銀行などの金融機関の大建築が次々と建てられ、それらを含む水辺の風景を描いた錦絵が多く描かれました。

▼一八八二年日本銀行開業の地(日本橋箱崎町)、そして現在の日本銀行本店の地、いずれも、日本橋川の水辺の立地です。

▼明治初期の試行錯誤の中で、貨幣・金融制度が整備され、日本銀行が誕生するまでの歩みを、明治初期の日本橋川沿いを描いた錦絵と共にご紹介しします。

※開館日等の情報は貨幣博物館ホームページをご覧ください。





from Washington, D.C.



散歩する人で賑わうワシントンD.C.近郊のトレイル

# プラントベースで健康と環境保護を追求するワシントンの人々

## —— 進化を続けるプラントベースフード市場

植物肉への関心は日本でも高まっていますが、米国では、植物肉をはじめとする植物由来食品（プラントベースフード）が広く浸透しています。スーパーマーケットの精肉コーナーには植物肉が豊富に並び、多くのレストランが植物肉料理を提供しています。また、自宅でバーベキューパーティーを開く際には、通常のバーガーパテやソーセージに加え、植物肉を用意するのが常識になりつつあります。

米国のベジタリアン人口は2000年頃からあまり変化していませんが、肉の消費を極力減らし植物中心の食事を心掛ける「フレキシタリアン（flexible+vegetarian）」の増加が植物肉市場の拡大を牽引していると言われていています（注1）。加工技術の進化による味や食感の改良により、植物肉はより幅広い層に食されるようになりました。5年後には世界の食肉消費の1割に達するとの予想もあり（注2）、成長分野として投資家からも注目を集めています。

ワシントンD.C.は、全米の中でも有数の「健康都市」（注3）とされ、市民の健康意識が高いことも

あり、フレキシタリアンに転向する知人も多くいます。きっかけは人それぞれで、健康を理由に挙げる人もいますが、最近は、畜産がもたらす動物福祉や地球温暖化への懸念を指摘する人が特に若者の間で増えています。先日、近所に開店した「おいしくて楽しい」がモットーの人気プラントベースレストランで昼食を取りましたが、その「茄子鰻にぎり」と「西瓜鮪にぎり」の完成度の高さは植物由来食品のイメージを根底から覆すものでした。技術と獨創性を駆使した植物由来食品のさらなる進化から目が離せません。（国際通貨基金本部、ワシントンD.C.）

（注1）Gallup社の2018年調査によれば、ベジタリアンと回答する米国人の割合は5%程度と1999年の調査開始時から変化がみられない。他方、International Food Information Council (IFIC)の2021年調査によれば、米国人の約4割が日常的に植物肉を食していると回答している。  
（注2）Business Wire社の2022年調査結果。  
（注3）ValuePenguin社の健康都市ランキングは、健康へのアクセス、食事・食品の品質、空気や飲料水の水質などの環境要因、住民の健康・習慣を調査したものである。ワシントンD.C.は、2022年調査において全米2位にランクされた。

\*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



スーパーマーケットの店内には植物肉専門バーガー店も存在

鰻はナス、鮪はスイカを代用したにぎりずし





にちぎん